

リアリズム文学研究会

Newsletter No. 1

Feb. 2020

1. 例会報告

■ 6月例会

本年度の6月例会は2019年6月30日(日)に大阪大学箕面キャンパスにおいて開催され2つの研究発表が行われました。野田農(フランス文学/同志社大学)の『ルーゴン=マッカール叢書』における都市風景の表象 — 歴史叙述と準備ノートの分析を中心に」では、準備資料に描かれた都市風景を歴史叙述との関連で読み解く試みがなされ、霜田洋祐氏(イタリア文学/大阪大学)の「フランドルの画家マンゾーニ — 『婚約者』と17世紀絵画のリアリズム」では、歴史小説と17世紀フランドル絵画との関連について検討されました。また研究発表に先立ち臨時総会が開かれました。その詳細に関しては「総会報告」をご参照ください。当日は大雨のため、参加者は多くなかったものの、有意義な発表と議論の場となりました。(野田)

■ 11月例会

本年度は冬の企画を開東で行うため、例外的に、先立つ秋の例会は2019年11月30日(日)、大阪大学豊中キャンパスで開催されました。研究発表として、森口大地氏(ドイツ文学/京都大学)の「仮死あるいは生きたままの埋葬への恐怖 — シュビンドラーの『ヴァンパイアとその花嫁』」では、19世紀の「死」をふまえた表題作の分析から、仮死者とその生殖という問題がヴァンパイア表象の新たな側面として提起され、続く奥山裕介氏(デンマーク文学/大阪大学)の「読む観客、観られる作家 — 19世紀デンマークにおけるイブセン受容と「印象主義」小説の誕生」では、ノルウェーの劇作家イブセンの活動がH・バングに与えた影響について、言語や劇場に関する諸問題も整理されつつ検討されました。少人数ながら会員以外の来聴もあり、聞き応えのある両発表について充実した議論ができました。今回初めて作成された例会の案内チラシは、宣伝に活用できるため続けたいと思います。(大北)

2. シンポジウム報告

2020年1月12日(日)、慶應義塾大学日吉キャンパスにて、リアリズム文学研究会第2回シンポジウム「交通と文学：鉄道の時

代としての19世紀」が、慶應義塾大学教養研究センターによる後援のもとに開かれました。初の関東開催となるシンポジウムでしたが、幸いにも50名近い参加者に恵まれる盛会となりました。魅力溢れる顔ぶれの登壇者の皆様と、各方面での広報にご尽力いただいた方々、そして当日近郊・遠方問わずご来場くださった皆様に、この場を借りて心より感謝申し上げます。

プログラムは昨年同様、3名の研究発表と2名のコメントおよび全体討議で構成されました。木島菜菜子氏(イギリス文学/平安女学院大学)の「ディケンズと鉄道再考 — 魅力、幻影、恐怖」に始まり、大楠栄三氏(スペイン文学/明治大学)の「鉄道と風景 — 1868年世代のスペイン小説において」、乗松亨平氏(ロシア文学/東京大学)の「私的なものの侵犯=生成 — トルストイと鉄道をめぐって」と続き、休憩を挟んだのち、小倉孝誠氏(フランス文学/慶應義塾大学)と奥山裕介氏(デンマーク文学/大阪大学)からのコメントを受けて、約1時間半の全体討議へと進みました。

シンポジウム全体を通して、鉄道という近代の産業化を象徴する技術をめぐる社会的状況や文化的イメージに、各言語圏・文化圏特有の要素と、反対に、言語圏の枠を越えて普遍的に共有されている文脈のあることが浮き彫りになり、19世紀文学を論じるうえで「鉄道」という主題が持つ特権的な有効性をあらためて認識する好機となったように思います。最後の全体討議では、登壇者相互に、また来場者からの質問を受けて活発な議論が交わされ、大変充実した(そして少なくとも司会を務めた自分にとってはあっとい間)の5時間となりました。(西尾)

■ 発表を終えて

木島菜菜子氏(イギリス文学/平安女学院大学)

イギリス文学と鉄道というテーマは、ヴォルフガング・シヴェルブッシュの名著『鉄道旅行の歴史』や、小池滋の数々の著作を始めとした多くの優れた先行研究の中で、重要な点はすでに提示され尽くしているように思われます。ですので、今一度論じることの意味はどこにあるのか、どのような新しいことが言えるのかと悩みながら原稿を作りました。結果的に広いコンテキストでの議論を避け、ディケンズの小説『ドンビー父子』から、ドンビー氏の鉄道旅行を描写した箇所を主に取り上げ、その文章表現を詳細に分析することで、既に定着している評価と創作上の意図を再検討する議論になりました。

他の発表者ならびにコメントーターの方々の話から、イギリス以外の国との多くの共通点や差異が浮かび上がったことは大変興味深く、また、鉄道という社会を大きく変えた技術が、人の思考や認識に大きな変化をもたらし、新しく多様な文学表現を生んだことを改めて認識することができました。最初にイギリスに鉄道が敷設されてから約190年、進歩を続ける科学技術と共に、我々はどう生きていくのか、その問いに向き合った過去の優れた作家たちの、想像性豊かな結果の一端が明らかになった有意義なシンポジウムだったと思います。ご参加いただいた皆さまに心から御礼申し上げます。



大楠栄三氏 (スペイン文学/明治大学)

「鉄道」というテーマをいただいた当初、スペイン文学で「19世紀」はきびしいな、と感じたのを憶えている。鉄道、とくに車窓からの「風景」を通してスペインについて思索をめぐらせたのは「1898年の世代」の作家たち、これについては膨大な研究があるが、その前の世代となると……という思いが脳裏をよぎったからだ。

ところが、いざ実作を読み進めてみると、確かに先行研究は少ないが、19世紀後半に活躍した作家たちが、鉄道敷設の展開と機を合わせ、鉄道に関連する要素を少しずつ作品に取り込んでいき、およそ四半世紀のあいだに《鉄道小説》というサブジャンルを完成させていく様が眼前に立ち現れてきた。

結果、《鉄道小説》を形作る要素の通時的変遷という現象にばかり目が行き、今回は解釈にまで及ばなかったのが本音である。他の発表者とコメントーターの先生方のご指摘から、現象をいかに解釈するのか——社会的や美学的にいかなる表象なのか——多くの貴重なヒントをいただいた。また、手弁当でシンポジウムの準備と運営に当たってくださった皆さま方にも、心からお礼申しあげたい。

乗松亨平氏 (ロシア文学/東京大学)

ロシアというヨーロッパの後進・周縁国の文化を専門としていると、中心に位置する国々との比較や影響関係を考えないでは済まされない。たとえばロシア文学における鉄道について考えようとすれば、まずは英国やフランスにおける事情をひととおり勉強することになる。しかし今回のシンポジウムでは、自分の勉強がじつに「ひととおり」のものにすぎなかったことが痛感され、たいへん刺激を受けた。周縁に与えた影響という観点から眺めると、中心は一枚岩的な権威へと単純化されてしまいがちだ。実際には中心のなかにも多様性があり、中心が周縁に与える影響もばらばらなのだということ（当然といえば当然の）ことを、議論の具体的なやりとりのなかで幾度も感じ、中心-周縁モデルには回収されえない問題もいろいろと発見できた。たとえば鉄道の敷設は各国の地形という自然条件に規定されており、それが鉄道をめぐる文彩やイメージに反映しているようだ——山がちなスペインで多用される蛇という比喻は、平野の広がるロシアではあまり見かけない。われわれ文学研究者は、鉄道という技術をどうしても文化的に人間化して捉えがちだが、その物質性にあらためて目を向けることも必要なだろう、と考えさせられた。みのり多い催しにお誘いいただいたことに、あらためて感謝申し上げる。

小倉孝誠氏 (フランス文学/慶應義塾大学)

産業革命と、それがもたらした社会の加速化の時代である19世紀を西洋文学全体の枠組みで論じようとする際に、鉄道ほど適切なテーマは少ないだろう。研究会運営スタッフの見識を讃えたい。新たなテクノロジーが時間と空間に対する人々の表象を大きく変えたということ、蒸気機関車がしばしば鉄の巨人や怪獣に喩えられたこと、風景描写に技法的な変革がもたらされたこと、鉄道事故に象徴されるように鉄道が悲劇の要素として機能すること、車両と駅が公的なものと私的なものが複雑に交錯する場であること——こうした点が、三人の密度の濃い発表から浮かび上がってくる、鉄道の文学的表象の共通要素だったように思う。全体討論の際に提起された馬車の旅との違い、鉄道が尖鋭化させた都市と田舎の差異、あるいはその交流なども興味深い論点だった。私の専門分野であるフランス文学・文化史の観点からも、得るところの多いシンポジウムだった。

奥山裕介氏 (デンマーク文学/大阪大学)

テクノロジーとは、驚異にして怪異であるといえます。この不気味な（＝住み慣れた世界を脅かす unheimlich）化け物に際会した作家たちは、あらんかぎりのメタファーを馳駆し、また人間の身

体経験や情動との連関に想像力を及ぼすことで、事態のありように言葉を与えようとしていました。

鉄道と文学をめぐる3つの専門地域からのご発表は、いずれもこの怪物を創作の道具 (instrumentum) として馴致せんとする芸術創造の内幕を覗かせるもので、抱えきれぬほど豊かな連想を誘われる思いで拝聴いたしました。用意したコメントが各ご報告の主旨から乖離することを内心危ぶみながらも、左右に座られた小倉先生と西尾先生が堅実な論点整理をしてくださった安心も手伝って、脱線や脱輪や乗り間違えを恐れず、私自身の問題関心から自由に発言させていただけたように思います。

お陰様で実り多き年頭の旅となりました。こののちもまた、どこかの「駅」でお会いしましょう！

3. 総会報告

6月30日(日)の研究発表に先立ち臨時総会が、また1月12日(日)のシンポジウムに先立ち総会が行われました。

6月の臨時総会では、まず、メーリングリストで回覧していた会則案が、参加者の賛成多数で可決されました。また2019年度の事務局委員について、大北彰子、西尾宇広、野田農、霜田洋祐の4名が引き続き務めることが承認されました。さらに、会則の施行にあわせて「運営方針」の規定を修正することが提案され、特にシンポジウムの実行委員については、①「年度ごとの実行委員については、メーリングリストによる6月例会の発表募集にあわせて、同時に募集をおこなう」、②「実行委員の選出については、上記の募集によって集まった希望者のなかから、事務局委員がこれをおこなう」、③「事務局委員のうち1名以上は必ず実行委員を兼務することとする」という3つの方針を加筆することが決定されました。

一方、1月の総会においては、まず、1月例会における個別研究発表の扱いについて協議されました。個別発表は、これまでは1月も午前に機会を設けるとされていたのですが、運営上の困難が指摘され、シンポジウムを開催する場合は基本的に個別発表は行わない方針とすることが、それにそくした「運営方針」および「会則第8条」の改正案とともに、参加者の賛成多数で承認されました。また、6月と11月の例会について、従来の「運営方針」では幹事が名指されていたのですが、これが実態とずれてきていることから、今後は「事務局委員が任命」という対応とし、「運営方針」もそのように書き直すことが賛成多数で承認されました。さらに、こうした「運営方針」の変更は、逐一総会での承認を要すると柔軟な対応ができないため、今後は、事務局が必要に応じて変更し、総会で「報告する」という形にしたいという提案が事務局委員から出され、その案が、それにそくした「会則第16条」の改正案とともに、賛成多数で承認されました。(なお、改訂後の「運営方針」と「会則」については研究会HPでご確認いただけます。)

今年度もリアリズム文学研究会の活動にご協力いただきありがとうございました。引き続きどうぞよろしく願いいたします。
(霜田)

発行日：2020年2月20日

発行者：リアリズム文学研究会

E-Mail：realismnliterature@gmail.com

* 編集担当：大北彰子、霜田洋祐、西尾宇広、野田農